史料紹介

古川松根科学技術及び兵学関連史料

文学研究科歴史学専攻博士前期課程二年
金丸智洋

一、はじめに

現在、佐賀藩科学技術への注目度の高まりは著しい。それは元来の注目度に加えて「九州・山口の近代化産業遺産群世界遺産登録推進協議会」の追加候補に佐賀の三重津海軍所や築地反射炉が候補に挙がった影響も大きいだろう。

近年では同時代史料以外による研究の多かった佐賀藩研究の状況を打開するため、同時代史料目録のカード化（データベース化）が進められるという、かつて本島藤太夫『松乃落葉』(1)が翻刻されて以降これが広く用いられ、幕末佐賀藩研究が活発化したように、この同時代史料目録が完成すれば以前に増して史料へのアクセスが容易になり、より深い佐賀藩研究が可能になることと思われる。

しかしながら、佐賀藩政史料は佐賀の乱によって消失してしまった史料が多く、同時代史料以外から拾わざる得ない事象も多い、従って後世の編集史料も依然として重要である。

このような史料の中で最も有名なものが前述の本島藤太夫の『松乃落葉』である。同時代史料ではなく、明治になって暫くしてから忘れ去られつつある幕末佐賀藩を、自己の日記と周辺史料から編集して著されたものである。このような経緯を持つ史料は多く、秀島成忠『佐賀藩銃砲沿革史』(2)『佐賀藩海軍史』(3)や中野禮四郎『鍋島直正公伝』(4)なども同様でありそのほかも枚挙に暇がない。

今回はそのような史料の中から、火術方周辺の史料探索をする中で見つけた古川松根（与一）を紹介させていただく。

古川松根の兵学者としての功績に注目して研究論文が書かれたことは管見の限り、大隈栄一『楢園遺集』(5)や一九四一年から一九四四年まで『肥前史談』に連載された千住生「古川松根筆記」（一）～（九）(6)において纏められた以外は出版物・論文は特に無い。近年では鍋島報效会と佐賀県立博物館の共催にて一九八七年に「古川松根展」が催され、その特別展に際して図録(7)が発行された。今回の史料も若干触れられてはいるものの、研究という形でまとまっているものは少ない。

また、科学技術・兵学に詳しい、前掲の『幕末科学技術の軌跡―松乃落葉』において古川松根は複数回登場するものの人物紹介や脚注などは行われていない。

しかし古川松根は『古川松根手控帳』『陣列教練指揮語・陣列教練』『陳列畧図』『新兵教練・隊列畧図』『隊列教練』『英式歩操中隊略図』『ベレトンスコール』など火術方に深く関連する史料を遺している。

二、書誌的事項

佐賀県立図書館OPACにおける書誌データは次の通りである。なお資料区分が書籍から古文書に変更されたため、資料コードは削除されると思われる。また括弧書き（　）内は筆者による補足で、原書の執筆年が分かる場合は記入し、それに続く番号は史料内に記述されたものである。「編入」とは県内の別の部署からの受入年を指し、45-128とは昭和四五年に一二八番目に編入された意味である。

・『古川松根手控帳』（ペン書　M36　11/9　45-128）
佐賀県立図書館資料コード130259633　S/2004/F93/
・『新兵教練・隊列畧図』（ペン書 編入 S46 6/30 46-199）
佐賀県立図書館資料コード130027576 S/390/F93/
・『陣列教練指揮語・陣列教練』（ペン書 S.390 F93編入46-200
佐賀県立図書館資料コード130047731　S/721/F92/
・『英式歩操中隊略図』（筆書　0733-15-2）（-015272）
佐賀県立図書館資料コード130027808 S/396/E37/
・『隊列教練』（ペン書　編入　S.459.30　45-369）
佐賀県立図書館資料コード130027816 S/396/F93/
・『陳列畧図』原書は安政5年
（ペン書　編入 S.45.9.30 45.-370 末尾に「18-10412」と記入）
佐賀県立図書館資料コード130027824 S/図/352/
・『ベレトンスコール』（ペン書　編入S45.9.30　45-338）
佐賀県立図書館資料コード　130027832　S/390/F93

これらの史料は佐賀藩の蘭式銃隊の導入、火術組の創設、惣鉄砲制の施行、火術方における佐賀藩大組や支藩邑領兵の調練受入、蘭式銃隊から英式銃隊への転換(8)といった、特に兵学上の出来事の背景にどのような研究があったかを知ることが出来る貴重な資料だといえるだろう。

三、各史料の紹介

以下に佐賀県立図書館史料コードの順に各史料の内容を紹介する。

法量は縦×横×厚で単位はミリとした。項数等はいずれも袋とじ単位は丁である。

『古川松根手控帳』174×252×13

本書には次の史料が所収されている。

「若松開城手続」　13丁
「常朝銭別箇条写」　5丁
「草庵雑談覚書」　5丁
「香焼詰心得之大意」

この「香焼詰心得之大意」には水軍調練と「黒舩乗附」なる黒

船への対処法などが書かれ、「天保十二丑年」という記述があり、原書の執筆時期が分かる。

またこの『古川松根手控帳』の末尾には「鍋252―37」なる記述もある。佐賀県立図書館OPACでは「本書は古川助九郎の筆写したものを明治三六年に太田保一郎が再度筆者したもの」とあり、ペン書き史料はいずれも類似した紙質の用紙が使われ、筆跡も酷似している点から、作成年代はいずれもこの時期前後であろうと推測できる。

『新兵教練・隊列署図』174 × 252 × 12

本書には次のような史料が所収されている。

「新兵教練」

「隊列署図」

この「隊列署図」の1丁には六種の役人符号が書き込まれ、紙の上三分の一に欄を設けて「高書シタルハ教師ノ指揮語」と断り指揮語と解説が記されるようになる。この他のペン書き史料ではこのような断り書きは見られず、それらの中で古いものであると推測される。

また2丁では歩兵が二列横隊を取る場合の前列と後列の間隔を「此間一尺六寸五分」と定めており、その横隊から何歩下がったところに役人が立つべきかなどといったことが詳細に述べられ、一隊を半分に分けた場合に「半隊」とし、さらに半分に分けた場合「小隊」としていたことがわかり、編成基準が推測できる。他にも銃捌きや足捌きが細かく述べられている。

また「隊列署図」の末尾には「此書は隊列の運動をわすれしの料にたゝ大むねをしるす」と書かれており、古川松根にとっての本書の位置づけがわかる。

『陣列教練指揮語・陣列教練』174 × 248 × 13

本書には次の史料が所収されている。

「陣列教練指揮語」27丁

「陣列教練」　29丁

この「陣列教練指揮語」は蘭書を和訳した史料と思われ、和訳とカタカナ化した蘭語の指揮語（号令）を併記している。

また、27丁には隊列の最高士官を教師として以下に一般兵を除く各役職の名称が記されている。

続いて「陣列教練」では所々朱書きが見られるが、24丁には「本島・島内合隊シ」[9]など佐賀藩の科学技術・兵学関連の人物名と思われる朱書きがあった。そして末尾には歩兵隊を八隊で組む方図が記入してある。なお、この図では、役人符号なる略符号が用いられておらず、原本は古いことが推測できる。

『英式歩操中隊略図』190 × 260 × 14

この史料のみ和紙に筆書である。今回管見の限りで「中隊」の概念が用いられ、また密収列編成など細かい指示もある。

そしてこの史料でも冒頭で役人符号があり、古川松根が書いた

時点からこのような符号を使っていた事がわかる。また、他の史料にある「教師」が「一番指揮方」に代わっている。ただ文中でも「教師」と表記にぶれがあり、同一のものとわかる。

『隊列教練』174 × 252 × 14

これには役人符号があるが凡例での解説はない為、古川松根の執筆順では比較的新しいと思われる。内容では一列横隊から二列横隊への転換法などが書かれている。

『陳列畧図』原書は安政五年 172 × 247 × 13

本書では2丁からは役人符号なる各役人の略符号が用いられるようになっており、その数は十七種と最も細かい。また特筆すべきは各役人の人数が書き込まれているため、基準編成がわかる事である。総計では士官および下士官等が七三名、兵五四〇名の計六一三名である。

また1丁の凡例において「高書シタルハ教師低書シタルハ指揮方ノ指揮語ト知ヘシ」他に「陣列八隊ナリドモ紙ノ都合デ四隊或ハ六隊ニ減軍モ」との記述がある。これ以降のペン書き史料『新兵教練・隊列畧図』『隊列教練』においてはそのような断り書きは無く、また略符号もさらに簡略化して使用されるようになっており、略符号を用いている資料の中では古いものだと考えられる。

尚、65丁には渡橋時の陣形が書かれている点も注目される。

末尾には古川松根による結びが書かれており、安政五年霜月と日時も記述されている。

『ベレトンスコール』174 × 252 × 12

58丁、役人符号が用いられている。その役人名も蘭語のまま、号令も蘭語のままである。役人符号は六種ある。

また、「教師」は「ロイデナントコロ子ル」と表記されており、これが英語では Lieutenant Colonel つまり中佐に相当するものであり、今回の史料における「教師」の身分が軍人であることがわかる。

四、おわりに

これら史料および原史料が古川松根によって書かれた時期を特定する事は難しいが、凡例や内容からおおよその順序を推定する事は可能である。

そして、嘉永三年に佐賀藩の十五大組のうち二組を火術方指揮下に火術組として再編し(9)、洋式銃隊の研究を始め、万延元年の惣鉄砲制や、藩内大組の洋式調練、さらには支藩邑領兵の洋式調練や、騎兵隊の育成(10)を司っていた火術方は、調練施設としても研究施設としても大きな役割を果たしていた。今回の史料はそういった多面性と専門性の深さを垣間見ることの出来る資料であると思う。

また、木原溥幸が「家臣団体制の解体」[12]において佐賀藩の家臣団編成が十五大組制から洋式の八大隊制への再編された時期は不明とされていたが、実質的な八大隊としての運用は弘化五年には既になされていた事が『松乃落葉』から推測できる。[13]このように後世に編集された史料から幕末佐賀藩の未解明の部分を明らかにすることは依然として重要であり、今回の古川松根兵学関連史料も重視していくべきであろう。

今後は、肥前史談会の活動と、今回の史料の寄託経緯を解明していきたいと思う。

附記

最後に今回執筆にあたりご協力頂きました鍋島報效会、佐賀県立図書館、の皆様に深く御礼申し上げます。

註

(1) 本島藤太夫『松乃落葉』は酒井泰治・向井晃『幕末軍事技術の軌跡―佐賀藩史料『松乃落葉』―』思文閣一九八七年の翻刻と解説よって広く利用されるようになった。

(2) 秀島成忠『佐賀藩銃砲沿革史』肥前史談会一九三四年

(3) 秀島成忠『佐賀藩海軍史』知新会一九一七年

(4) 中野禮四郎『鍋島直正公伝』侯爵鍋島家編纂所一九二〇年

(5) 大隈栄一『楢園遺集』一九二六年

(6) 千住生「古川松根筆記」（一）～（九）（『肥前史談』所収）

(7) 佐賀県立博物館「古川松根―人と作品」一九八八年

(8) 『幕末軍事技術の軌跡―松乃落葉』二九一頁

(9) 本島・島内とは本島藤太夫と島内栄之助を指すと思われる。両者とも火術方役人、前者は『松乃落葉』の著者。後者は万延元年の遣米使節随行。後に藩主への報告書にて英語の必要性を上申。後に長崎入港の英国軍艦で英式訓練を受け、兵制を蘭式より英式へ変える」（『松乃落葉』三六五頁（3））

(10) 前掲『幕末軍事技術の軌跡―松乃落葉』六四頁

(11) 前掲『幕末軍事技術の軌跡―松乃落葉』二三六頁

(12) 木原溥幸「第四章　家臣団体制の解体」一〇一頁（『佐賀藩と明治維新』九州大学出版会二〇〇九年所収）

(13) 前掲『幕末軍事技術の軌跡―松乃落葉』二二一頁